

# 友の会だより

No23 嬬恋郷土資料館

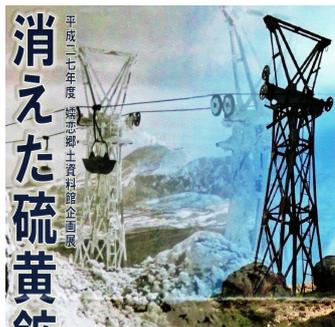
2015年12月発行

## 「資料館」「友の会」下期のイベント

嬬恋郷土資料館「友の会」(小林勝太郎会長)では、本年下半期も様々なイベントを企画、活発な活動を繰り広げてまいりました。今回の「友の会だより」では、上半期同様、下半期のイベントや活動の様様をダイジェストとして紹介します。

===== ☆ ☆ =====

6月12日にスタートした企画展「消えた硫黄鉱山」(8月22日～8月31日は展示替えなどのため休みました)が10月25日、好評のうちに終了しました。



平成二十七年 嬬恋郷土資料館企画展  
消えた硫黄鉱山

かつて嬬恋村には豊かな硫黄鉱床が江戸時代から昭和の閉山まで産出され、嬬恋村の特産でした。全盛期の昭和35年の鉱山人口は3500人余りを数え、明治時代からの日本の近代化と第二次世界大戦後の復興に大きく貢献しました。今回の企画展では、昭和の嬬恋村の産業を支えた小串、吾妻、石津の3つの硫黄鉱山を紹介します。

かつて、豊かな硫黄鉱床に恵まれていた嬬恋村には、小串、吾妻、石津など硫黄採掘の鉱山がいくつもありました。それは江戸時代から、各鉱山が閉山された昭和40年代半ばまで続き、全盛期の昭和35年には鉱山人口は3500人余を数えるほどでした。そして、明治以降の日本の近代化や、戦後日本の復興に大きく貢献したのです。



村としても初めての硫黄鉱山展。かつて全盛期、鉱山(やま)の男やその家族たちは、小串に、吾妻に、石津にと、村内有数の集落をつくり、そこを生活の基盤としてきました。硫黄鉱山展が始まると、入場者も徐々に増え、県内外から「かつて小串鉱山にいましてねえ…」とか「吾妻鉱山の小学校の教師をしていました…」などという人が相次いで来館。削岩機の実物や硫黄の塊などの展示物にじっと見入る人

かつて自分がいた鉱山で作られた文集やアルバムを感慨深げに繰りながら、同行した家族に身振りを交えながら説明する人、それぞれが若かりしころを思い起こしながら、郷愁にかられているようでした。



期間中様々な人が来場した「消えた硫黄鉱山」展の会場

平成27年度企画展

消えた硫黄鉱山

好評のうちに閉幕

そうした中、9月17日には関連イベントとして、同資料館二階視聴覚室で、「小串鉱山地滑り災害を語る会」が開かれました。これには、今年97歳の高木高四郎さんが出席、昭和12年に起きた地滑り災害の様子を、実際現場にいた当事者ならではの生々しい描写を交えながら語ってくれました。



それは昭和十二年十一月十一日午後三時半過ぎのことでした。それまでの

の長雨で鉱山背後の斜面が緩み、恐ろしい唸り

とともに長さ一五〇メートル、幅一五〇メートルにわた

って崩落、大量の土砂は轟音とともに六〇

メートル以上も流下したのです。これによつ

て鉱山施設や社員住宅、小学校の分教場な

どが一気に押しつぶされ、埋没してしま

ました。さらに被災住宅から出火した火が

製錬した硫黄に引火、火災まで起きたのです。

これによつて社員や子供も含めたその家族ら

二四五人もの人々が犠牲になりました。

硫黄を満載したトラックを押して坑口まで出てきた、当時一九歳だった私

は、ちょうどその時、轟音とともに崩落してきた土砂に巻き込まれてしまつ

たのです。一瞬もう終わりかと思いましたが、それでも必死で土砂をかき分け

て這い出し、すんでのところまで命拾いしたのです。そして、坑口の外の惨

## 昭和12年の小串鉱山地滑り災害

も言われぬ恐ろしさを覚えた

です。その**当時第一報を**  
もたらした**高木さんが講演**

にも村の人たちに知らせ、助け

を呼ばなければ！」と、通信手段を失われた現場から、二〇キロメートル余り離

れた麓の婦恋村役場に向けて夢中で駆け出したのです。午後4時過ぎだった

と思います。山道を下り始めた時には、すっかり日が暮れ、藪に覆われた細

い山道は危険がいっぱいです。それでも、一刻も早く救援を求めなければと、

必死の思いで山道を駆け続けました。

災害発生からおよそ3時間、ようやくと役場に到着、当直の職員に災害発

生とその惨状を通報し、直ちに消防や警察、職員が非常召集されました。そ

して救助活動の準備が開始されました。翌早朝、私は消防団など救助隊と

ともに鉱山へ引き返し、スコップを手に無我夢中で救助活動を行いました。今

から思えば、重機のような機械もなく、この程度のことしかできませんでし

たが、もつと多くの人を助けることができなかつたものか、今も無念な思い

(要約)

## 恒例の村外研修

# 糸魚川世界ジオパーク

## 野尻湖ナウマン象博物館を見学



平成27年度の「友の会」村外研修が10月21日、小林勝太郎会長、資料館の黒岩修二館長ら21人が参加して実施され、新潟・糸魚川市にある「糸魚川世界ジオパーク」と長野・信濃町の「野尻湖ナウマン象博物館」を訪ねました。

まず糸魚川世界ジオパークでは、ドイツの地質学者エドモント・

地質的に西日本と東日本を分ける  
フォッサマグナ(大きな溝)。